

## 街頭の晩春

— 舊作なれど時ならで熊本を去る吾れなれば —

二、三、甲 小島 紫葉

活動寫眞の赤びらの  
路上を舞ひつ春の日の  
くれ行くかなど

それも悲しや。

柳並木の葉の繁りは  
埃に染みてうす白く  
途上にたえずみ

泣けるがごとし。

かんらん、の茂る國はいかにと  
ペーヴナントの上を歩きつ  
ひとり思へる

日光はそよぎ。

中央公論の古本を買ひて

大切さうに抱いて歸れば  
新屋敷の室の静けさ

だれも居ず。

## 雨の口と幻影

同

生けるものは皆大地に額づけり  
ちろくと若者の胸に燃え出づる火よ。

くすめる壁……

なまり色の空……

あはれ、感激は滅び、

輝けるものは消えゆく、

浸潤しゆく雨氣の

わが魂<sup>たましい</sup>を虐げむとす。

これやこの、八月の

人間性の燃ゆるころ、

おされ行き、歩みし吾れは。

ほのぼのと明<sup>あ</sup>くると見しは。